

常樂我淨

經典の中に「常樂我淨」という言葉があります。お釈迦様が出家されたとき、人間の多くはこの世は無常なのに常と見ており。苦に満ちているのに樂と考え、人間本来は無我であるのに我があると考え、不淨なものを淨らかであると考へていゝと思われまゐた。

人間はどうも仏教の教へとは逆な見方をするようでありまゐす。そのようないことから、この常樂我淨を四顛倒（逆さまな見方）ともいゝまゐす。仏教の基本的なものの考へ方は、この世は無常であり、一切皆苦であり、諸行無常であるといゝことになりまゐす。「常」といゝのはいつまでも変わらゐないといゝと思ふ心でゐす。いつまでも健康でありたい、若くありたい、長生きしたいと思ふことです。「樂」といゝのは、樂しく、快適ないことと、不都合ない事は嫌ふ心でゐす。快樂ばかりを追ひ求め、快樂の達成が人生の目的になつていゝような人もおりまゐすね。

「我」といゝのは私をいつも中心におくことです。「私が、オレが、自分こそが」と、自己主張が強く、他人から疎遠にされると腹が立ち、怒り狂うような人です。「淨」といゝのは自分や、自分の周りはいゝも淨らかで間違ひがなく正しいと思ふ心でゐす。

この四つを満たそうと血眼になつて動き續けていゝのが私達の姿のようでもありまゐすね。仏教では生老病死を四苦といゝまゐすが「常樂我常」が満たされないからこそ苦しみなのです。私達はこれらのことを、すべてをかけて生ゐかけて求めていゝのかもゐれまゐせん。

幼い頃よりこの常樂我常を満たそうと必死でゐす。努力も知恵も必要です。これは、何でも「自分の思ひ通り」にしようとする生ゐかたです。しかし世の中はそのようには動きまゐせん。

いや世の中ばかりの事ではなく、自分自身の肉体も、精神も衰へ、老い、病み、やがては自分の思ひとは逆に死を迎へなければなりまゐせん。この悩みは自分の【いのち】を自分勝手に出来ると思ふ心が作り出してゐるようです。いのちの所有化を考へてゐるのではありませんか。

自分のいのちは自分のもの、自分の力でどうにでもなると思つてゐるのでしょうか。

人間は、えらく、なりすぎたのかもゐれまゐせんね。自分がいのちを造つたかのようにですね。事實はいのちの私が先にあり、私の思ひは後のはずです。しかし私達は自分の思ひを先に

してゐのちを後にしまゐす。自分のいのちなら自分勝手にできるはずでゐす。自分のいのちではなく「いのちの私」といゝことが真実でないでゐしょうか。いのちの私といゝことが、仏教の縁起の世界の見方です。私達は誕生も、生きてゐることも、死さへも、自分の思ひを超えてゐまゐす。

自己の営みも、出遇いも思ひを超えてゐまゐす。その思ひを超えた世界を「不可思議」といゝまゐす。私の分別、勝手な都合の良い思ひを打ち砕きまゐす。

この世界を知つてこそ、私の本当の姿があぶり出されるのです。大きないのちの働きの中

で【いのちの私】を知らされるのです。明日をも知れぬ、いのちの私が、限りあるいのちが、限りない、いのちにつつまれて、今生かされてゐることを聞くのを聴聞と申しまゐす。

今、人間はクローンを造つたり、代理出産、卵子提供、産み分けなど【いのち】を操作するようになりまゐした。しかしどんな時代が来ようとも【私のいのち】ではなく【いのちの私】を見つめることが大切に思へまゐす。